

最強ワザ&最新タックルでレベルアップをめさせ!

アユ釣り マガジン

"AYU-TSURI" IS THE JAPAN ORIGINAL

2007

Naigai Mook

ビギナーからエキスパートまで楽しめる一冊

DVD発売記念
プレゼント

ダイワ精工 グランドスリムⅢ
が当たる!



村田満が
突っ走る

6人の掛けバリセッティング
腕利きたちの
ハリ合わせ

WAZAを磨く二本柱
名手の川取り
超ポイント
選択術

友釣りの疑問を一発解消
スキルアップの
特盛りQ&A

ロッドからハリまで270点を網羅!
友釣り最新タックル2007

アユたちの水中激闘録

攻めのオトリ 操作術

'07最速の入れ掛かりに迫る!

密着
ドキュメント

空中輸送の背後に見えた
川読みの眼力

吉田健二 ①鳥取県
②日野川

漁師感覚の
若手ソリッドマスター
島啓悟 ①福井県
②九頭竜川

注目の激流派が魅せた
技とプライド

坂本禎 ①栃木県
②那珂川

読者が選んだ
行ってみたい
全国 17 河川
完全ガイド

釣り友ステーション

TOMOZURI STATION

ダムだらけの川で生き残りをかけた自己規制と経営改善

矢作川環境漁協宣言と天然アユ復活の裏側

中規模都市の間を流れ下り、その間にいくつものダムで寸断された矢作川は、アユ復活にとっては非常に厳しい生息環境の川である。「平成の大不漁」と呼ばれた先行きの見えない時代に流域漁協や組合員たちは、海産アユの汲み上げ放流、春の遡上を助けるための矢作ダムの運用協力を柱とした天然アユ復活への道へと大きく舵を切りかえた。そしてその方向転換は明確な現象として現れつつある。

矢作川水系にはダムが多い
水は徹底的に利用される

矢作川は長野県南部の山岳地帯にみなもとを發し、岐阜県東部を經由して愛知県中央部を南下し、伊勢湾の一部である三河湾に流れつく。全長117kmの中規模の一級河川である。

矢作川水系の特徴は、第1にダムが多いことである。中・下流域は大農業地帯であり、自動車産業を中心とする一大工業地帯でもある。10〜40万人級の中規模都市がいくつもあり、いまの流域人口は140万人程度か。

第2の特徴は、河川利用率が圧倒的に高いことである。これらのダム群から、矢作川の年間流量の40〜50%が陸上へ取水され、農業用水、工業用水、上水道用水として使われている。

矢作川の水は陸上への「取水」という形で徹底利用されているだけではない。水力発電所が本川と支流に無数にあり、河川内で矢作川の水は繰り返し使われている。ダム湖が多く、ダム湖と発電所の間水枯れ区間がたぐささんある。魚類の生息環境という点では、きびしい川である。

第3の特徴は、矢作川は魚にとつては非常にきつい環境の川ではあるが、最近になって「天然アユ」の復活が明確な現象になってきたことである。「天然遡上アユが釣れる川」として、矢作川は有名になってきた。

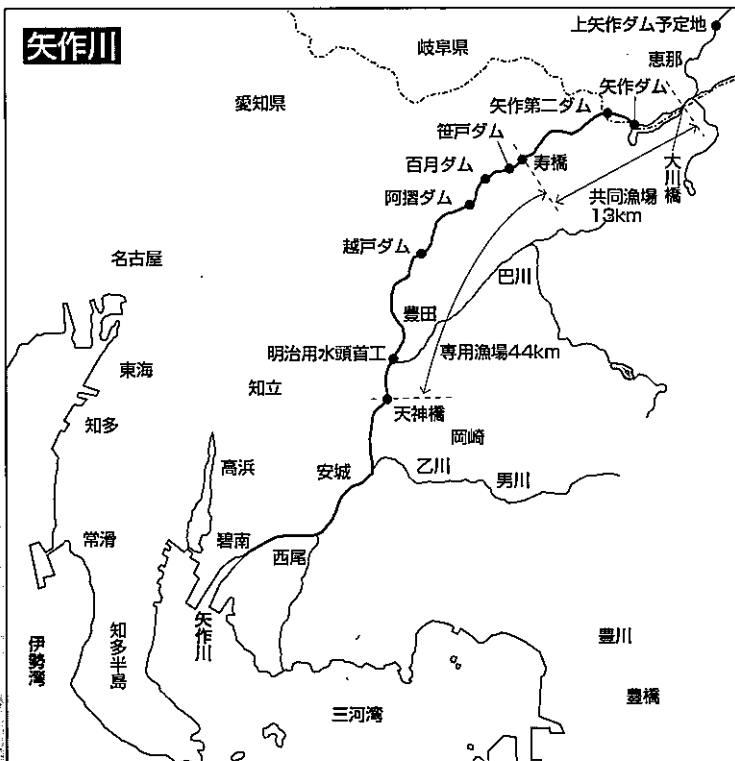
10年続いた「平成の大不漁」 冷水病と放流尾数激減の危機

矢作川では「平成の大不漁」といわれる時代が、ごく最近まで約10年間も続いてきた。アユ釣りの年間入川者数が7000人前後まで落ち込むことが、しばしばあった。それが

最近3年間連続で天然アユの好調な遡上が続く、2004年と2005年は約2万人にまで回復した。続く2006年(昨年)の天然アユは、遡上数では好調だったが、遡上稚魚のサイズが小さかった。そのうえに春の渇水、夏の冷水温が重なり、8月上旬までの漁期前半は天然アユ、放流アユ(人工孵化)ともに大不漁だった。しかし、8月中旬から天然アユが釣れ始め、年間の入川者は前年の8割の1万6000人台に達した。

以上の矢作川の状況は、「よく利用され、なお美しい矢作川の創造」をめざすという最近10年間の矢作川漁協の新路線の成果のように思われる。新路線の成果がばちばち見えてきたよう思われる。

矢作川では全国の河川と同様に、昭和末期まで琵琶湖産稚アユ放流による好釣時代が続いた。それは琵琶

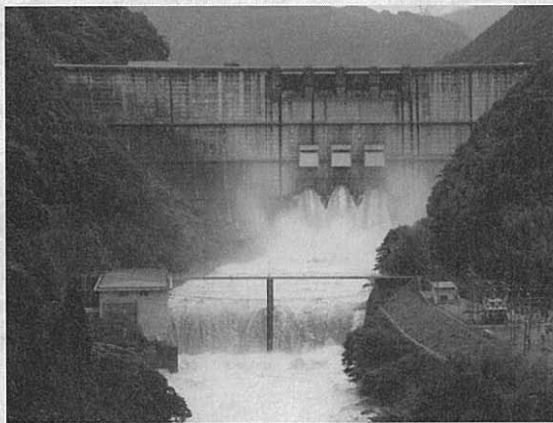


TEXT
新見幾男

にいみ いくお 1937年生まれ。岐阜大学農学部卒業。週刊ローカル紙「矢作新報」社主。矢作川漁業協同組合組合長。豊田市矢作川研究所前事務局長・現幹事。趣味はアユ釣り。愛知県豊田市在住。



矢作川で元気のよい天然アユの入れ掛かりに歓喜！平成の大不漁時代は入川者数7000人まで落ち込んだが、天然アユの遡上が好調になったこと3年は毎年1万6000人以上の釣り人が訪れた



1971年に河口から80⁰地点に建設された矢作ダム。総貯水量8000万³、堤高100⁵、堤長323⁵。このことで矢作川の生態系や流砂などの物質代謝が完全遮断される。ダム下流部の冷濁水被害も大きい。被害軽減のため、国土交通省、中部電力、漁協の環境定期協議が続いており、効果をあげている。

湖産アユに冷水病まん延という事態で突然終わり、平成に入って人工孵化アユ放流の時代に入ったが、人工孵化アユにも冷水病は多発した。矢作川においては、この時期は最悪であり、前述のように「平成の大不漁」時代として記憶されている。不漁の原因は二つあったと思う。第1に人工孵化アユが多発する川でダムが多く、泥濁りが多発する川では、うまく成長しなかった。放流アユの歩留まり（生存率）がきわめて悪かった。

不漁原因の第2は、稚アユの放流

尾数が激減したことである。矢作川の琵琶湖産アユ最盛期の時代には、放流量は10³、250万尾（1尾4³）くらいだった。平成の人工孵化アユ時代には、最低のときには6³、50万尾（1尾は12³）くらいにまで落ち込んだ。これは矢作川だけの出来事ではなく、全国的な傾向だと思われる。

苗生産業者が大型種苗しか出荷しなくなった。不漁続きのいまの内水面漁協の財政では、放流尾数を減らさざるを得ない。放流量を尾数でいわず、トン数で表現するようになった。釣れなくて当たり前である。矢作川の「平成の大不漁」とは、そういう時代だったなあ、といま思いだしている。

釣り人が天然アユ調査委員会に 矢作川と三河湾を研究

この平成の大不漁時代に、矢作川関係者の天然アユの調査、研究は始

まった。1994年（平成6年）、矢作川漁協からの苦しい紛れの提案で、豊田市、農業用水団体、漁協による第3セクター経営で豊田市矢作川研究所（最近、市営になった）が設立された。その2年後の1996年には、同研究所の調査・研究を支援する市民団体として矢作川天然アユ調査会が誕生した。大部分が矢作川の釣り人である。漁協組合員が調査委員会になったり、調査委員会が漁協組合員になったりしている。

矢作川天然アユ調査会は現在、正会員30、準会員30、計60人の会員数

である。彼らが矢作川研究所の計画のもとで、矢作川と三河湾の天然アユ生態調査を10年間続けてきた。最初は西日本科学技術研究所（高知）、いまは「たかはし河川生物調査事務所」（高知）の学術的な指導を受けている。

矢作川漁協は、1902年（明治35年）の誕生のときから農業用水利権・発電水利水権と100年間たかいかいながら生きのびてきた経緯がある。伝統的に非常に闘争的な団体であったが、矢作川研究所や天然アユ調査会の創設に参加して以来の近年は、次第に体質・路線を転換してきた。それが前述の「よく利用され、なお美しい矢作川の創造」をめざすという新路線である。10年続いてきた。

この新路線のもとで、電力会社・農業用水団体・漁協の「矢作川経済3団体」の共存共栄の関係がまあまあ確立され、天然アユ復活事業が少しずつ進み始めた。中部電力と漁協の間では、もう7年間も矢作川環境

に関する定期協議（年2回）が続いている。国土交通省、愛知県との間でも定期協議が行われるようになった。昨年の5月2日には、矢作川水系の3大農業用水団体の理事長会議が「田植えとアユ遡上は共存共栄で」という原則を確認してくれた。

16項目のマニユアル 汲み上げ放流でダム越え

矢作川には、天然アユを復活するための課題をまとめた「16項目のマニユアル」がある。矢作川研究所、天然アユ調査会が各種の課題を一覧表に整理してくれたものだ。

上記の各種定期協議の共通テーマは、16項目のマニユアルをいかにクリアするかである。主要な部分はすでに事業着手されてきた。その中には、産卵場の造成、産卵保護禁漁区の設定、禁漁区の監視活動、網漁・ガリ漁（引っ掛け）の期間短縮などの漁協単独事業もある。用水路に迷い入った産卵親魚を大漁捕獲して、水槽車で産卵場へ搬送するような電力会社、農業用水団体、漁協の共同事業もある。

毎春の継続事業では、最下流のダム魚道で遡上アユを捕獲し、それを上流域へ水槽車で搬送する、いわゆる「汲み上げ放流」が最も重要な事業である。ダムだらけの矢作川では、流量不足の年が普通であり、トラック搬送で遡上アユの「ダム越え」を助ける事業である。

天然アユの春の遡上、秋の降下には、最上流の大型ダム「矢作ダム」の運用が最も大事である。遡上期と降下時に必要な流量を矢作ダムに貯水しておいてもらい、それを適切な



河口から34*地点の明治用水頭首工の魚道で、県から特別捕獲の許可を得て天然遡上アユの稚魚を捕獲。これから水槽車でダム群のある中流部や上流部に運び、放流する。「汲み上げ放流」という



↑豊田市矢作川研究所の研究者や矢作川天然アユ調査会の調査員らが、三河湾の波打ち際で、矢作川から流下してきた天然アユの「仔魚」が「稚魚」に成長していく状況を調査している。昼間調査



→矢作川で孵化した直後の天然アユの流下仔魚を採捕。研究所で孵化後の経過日数などを分析し、三河湾への流下量も推定する。夜間調査

の近況である。

2003年、矢作川漁協は創立100周年を機に「環境漁協宣言」を採択し、同名の100年史誌を出版した。ふり返ってみれば、結果として、矢作川漁協は河川環境を切り売りし、補償金で100年間生き延びてきた。私たちはもう限界であると判断した。もう補償金で妥協せず、まず流域協調体制をつくり、河川環境自体を改善していくことにした。これが「環境漁協宣言」の中身であった。私たちは「環境漁協宣言」を第2段階へ進めようとしている。それは自己規制できる漁協、組合員への体質改善だろと思う。そういう路線上で、まずは豊田都心地区の矢作川で「周年友釣り専用区」を試行しようとしているのが、矢作川漁協

時期に放流し、遡上、降下を促進することでは、すでに総論的に合意できている。しかし、今冬、今春のような異常少雨の年は、5月段階で「田植えとアユ遡上」の共存共栄が難航し、トラブルが起きそうである。矢作川漁協では今、漁協経営を「天然アユ」で安定させるために、長期計画と短期計画の二つの大きな議論を組織内で続けている。

まず長期計画。全長117キロの矢作川の主流と支流には、上流から①平谷川漁協（長野県平谷村）、②根羽川漁協（根羽村）、③岐阜県矢作川漁協（岐阜県恵那市）、④名倉川漁協（愛知県豊田市）、⑤矢作川漁協（同）、⑥巴川漁協（同）、⑦岡崎市漁協（愛知県岡崎市）、⑧男川漁協（同）の8つの内水面漁協がある。

このうち矢作川漁協が組合員数（1127人）、漁場面積で最大であり、その漁場は矢作川水系の中央部にある。すでに水系7漁協の連絡協議会があり、矢作川漁協内に事務局を置き、情報交換をしたり、下流部では天然アユ繁殖保護の共同事業を行ったりしている。

今年3月24日、矢作川漁協の第41回総代会が開催され、水系8漁協で「組織合併研究会」を設置する方向を決めた。ほかの漁協とも打ち合わせ済みである。

打ち合わせ段階での漁協合併の基本方向は、次の通りである。

①今年4月に8漁協合同役員会を開き、組織合併研究会を発足させる。

②現在の8漁協の組織、漁業権、財産等は現状のまま存続させ、従前の経営を継続する。主として内政担当。

③矢作川水系の漁業が直面する次の重要課題に「共通の意思」で対応するため、8漁協で連合組織を設立する。主として外交担当。

④国土交通省が岐阜県恵那市地内に新設計画している上矢作ダム（多目的ダム）について、情報収

集、調査研究を始め、矢作川水系の漁業の持続的発展の立場から、ダム新設計画の是非を判断する。

⑤既存ダム群の構造、運営の改善について、ダム管理者と交渉を始める。

⑥矢作川水系の河川環境改善の立場から、流域の森林保全事業に参画する。

⑦矢作川上流部の矢作ダム湖での天然アユ稚魚繁殖の可能性を調査研究する。

⑧矢作川下流部の天然アユの産卵場整備、仔魚の海への降下、稚魚の河川への遡上のための各種事業を行う。

⑨天然アユ稚魚の上流への汲み上げ放流、産卵親魚の産卵場への汲み下げ放流の事業を行う。

⑩三河湾の環境改善事業に参加す

る。

⑪人工孵化アユの種苗購入、放流、害魚駆除等の情報交換を行う。

⑫カワウの異常繁殖防止対策を国県に陳情する。

⑬8漁協共同で役員、組合員交流、研修を行う。

⑭網漁やガリ漁をやめ、友釣り専用区を増やす

次に短期計画（矢作川漁協単独計画）。矢作川漁協には、本川延長で専用漁場44キロ、共同漁場13キロがあり、専用漁場内に8つの支部組織がある。

このうち豊田都心部にある「豊田支部」が来年（2008年）から管内の網漁とガリ漁を全面禁止する。管内全域を周年友釣り専用区にするわけだ。2年間の準備期間を経て、

そういう結論に達した。豊田支部の上流に続く平戸橋支部、中和支部の2支部でも管内を周年友釣り専用区にする方向で内部議論をしている。この合計3支部は、いずれも天然アユ遡上区であり、漁場の総延長は20キロほどである。

周年友釣り専用区化の目的は、①産卵親魚を一網打尽にとつてしまわずに、とり残して下流の産卵場へ送り込む。②友釣り愛好者を増やすことによって、漁協経営を改善する。③の2点である。漁協、組合員が欲望を自己規制し、こうでもしなければ、ダムだらけの矢作川では、天然アユを増やすことは困難であろう。また、異常気象下で3年に2年は大雨、濁流被害のある矢作川では、こうでもして経営改善しなければ、内水面漁協は生き残れないと思うようになった。